

事後評価報告書(日フィンランド研究交流)

1. 研究課題名:「バイオエレクトロニクスデバイスへの応用を目指す自己組織化分子材料の開発」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:九州工業大学 大学院生命体工学研究科 教授 春山 哲也

2-2. フィンランド側研究代表者:フィンランド国立技術研究センター バイオナノマテリアルチーム
チームリーダー Markus Linder

3. 総合評価:(A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

ナノバイオエレクトロニクス分野は、液体、固体、その界面を含むナノテクノロジーとして機能制御に多くの困難を伴う領域であり、本プロジェクトにおいて両国の異分野研究者間での深い信頼関係の下で行った共同研究は、ナノバイオエレクトロニクス分野におけるタンパク質工学の重要性を明確なものとした。

目的とするデバイスへの自己組織化創成への道は遠い。タンパク質工学に必要なゲノム解析、応用研究集団の参画がこれ以降は必要に思える。

(2)交流成果の評価について

若手の研究者が本研究を通してグローバルな人材として成長し、研究者としてのキャリアパス形成に繋がったことは評価できる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

本研究は生命科学と材料科学に跨る分野であり、両国の研究者が異なる分野から「界面」を共通のキーワードとして共同研究を行った結果、提案目的に沿った成果を挙げたことは高く評価できる。異分野交流の成功例が少ない我が国において、国際協力でこのような見事な花を咲かせたことは、今後の我が国の研究交流に良い刺激を与えるものである。大学院生を含めた若手の積極的参加が、両国間の指導者の深い信頼関係のなかで遂行され成果を得たことは、科学技術研究の国境を取りはらう重要性を確認させるものであった。

国際学術誌に共同研究の成果が共著として投稿されており、今後もこの趨勢が継続することが望ましい。双方の綿密で深い信頼の下で行われた、研究計画、調整の結果がこの成功を導いたものと言える。